夢のぬかるみ

山崎 巌

新潮社

のぬかるみ

山崎 巌

H84253

新潮社

夢のぬかるみ

© Gan Yamazaki 1993, Printed in Japan

平成五年二月十五日　発行

著　者／山崎　巌
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部（03）三二六六—五一一一
　　編集部（03）三二六六—五四一一
郵便番号一六二
振替　東京四—八〇八
印刷所／大日本印刷株式会社
製本所／加藤製本株式会社
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-380102-6　C0093
価格はカバーに表示してあります。

夢のぬかるみ■目次

第一章　街から街へつむじ風　5
第二章　女を忘れろ　73
第三章　さすらいは俺の運命（さだめ）　145
第四章　男が爆発する　217
第五章　渡り鳥いつまた帰る　291

〔装画〕畑中　純

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

夢のぬかるみ

第一章　街から街へつむじ風

1

いくつか並んだ受付のあたりで、来客の黒い頭がうごめいている。背後から爪先き立ったぼくの眼に、「脚本家」の標識が上下した。人群れをかき分けて進み、弾き出されてその標識の前に出た。

そこだけが、ぽっかりと空いている。名簿に眼を落とすと、仲間はまだ誰も来ていない。最初に署名を終えたぼくに、受付の女子社員が一枚のカードをくれた。

石原裕次郎の似顔絵が印刷された、五百円のテレフォンカードだった。彼の葬儀のとき、列席者全員にこれを配ったらしい。その噂をどこで聞きつけたのか、つめかけた数百人の中年女性が、葬儀もそっちのけでカードに殺到したという。

――こいつは、一年持っていれば三倍になる。

と、せこいことを考えながら、第六ステージへ向かった。

一九八七年――昭和六十二年八月二十日。

にっかつ撮影所。午後六時。

その年の七月、癌で逝った大スター、石原裕次郎をしのぶ夕べに、ぼくは招待されて来たのだ

った。

会場になっている第六ステージは、ナイトクラブのフロアと、中二階のセットを組めるほどの広さがある。

開会は七時。

まだ一時間もあるせいか、入っている客の姿はまばらだった。

正面の壁には、白と黄色の菊で縁どられた、たたみ三畳大ほどの裕次郎のブロマイドが八重歯をみせて微笑(ほほえ)んでいる。テープから、彼が唄う『銀座の恋の物語』が流れていた。

一般にこの歌は、同題名の映画主題歌と思われているが、それは違う。ぼくと山田信夫が共同で脚本を書き、昭和三十六年の正月作品として封切られた『街から街へつむじ風』の主題歌である。

映画の中で、悪党たちに追われたドイツ帰りの医師裕次郎が、ナイトクラブへ逃げ込む。悪党たちが更に迫る。彼はとっさにステージへ駈け上り、女性歌手とデュエットしながら、眼だけは逃げ場を探す、というシーンに挿入された。

封切り後、この主題歌が大ヒットし、翌、昭和三十七年三月一週、同題名の映画が製作されたといういきさつがある。

現在(いま)でもカラオケでは「ギンコイ」と呼ばれ、デュエット曲のベストファイブに入っている。だが、大部分のカラオケ・ファンはこの映画を観ていない。観ていれば、女性の横にただ突っ立ったまま唄ったりはしない。右手で女性の肩を軽く抱き、眼線だけは鋭く左右を窺(うかが)っていなければいけない。それが本当の唄い方というものだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

見廻すと、客の姿がだいぶ増えていた。殆どがスーツ姿だ。

――女房のいう通りだったな。

いつものようにポロシャツで出かけようとしたぼくは、女房にたしなめられて渋々とスーツに着がえた。十四年前、銀座の英國屋で注文したグレーのサマースーツだ。生地はフィンテックスで、二十万近くした。

当時は襟幅がいまの倍ほどあるのが流行だった。が、ぼくは標準に固執した。なにしろスーツなどは、年に一度ぐらいしか着る機会がない。大枚はたいて注文したからには、流行にとらわれず、一生着こなすつもりだった。襟広は間もなくすたれた。いまではぼくの襟が標準になっている。

正確に数えると、そのスーツは十四年間で十回しか着ていない。だから、仕立おろしにみえる。それと、ランバンのワイシャツ、一本しかないイッセイ・ミヤケのネクタイ、年に一度程度しかはかないバリーの黒靴……これだけブランド物でめかし込めば、誰に会っても恥かしくはないだろう。

それにしても、客の中に顔見知りはひとりも居なかった。

無理もない。日活がロマンポルノの製作に転向する直前、ぼくは専属をやめていた。以来、十六年経っている。

なにも、自分からやめたわけではない。裕次郎や小林旭が主演していた映画の製作費は、一本平均四千万円だった。だからぼくもそれなりの脚本料を貰っていた。ところが、ロマンポルノの製作費は、その八分の一に当る平均五百万円。そうなると、会社は今までのような脚本料を払え

なくなる。つまり、お払い箱になったのだ。
それに会社自体「日活」という社名を一九七八年に「にっかつ」と変えている。いくら自分が育った撮影所とはいえ、今は全く異質の場所なのだ。
そう思うと、居心地が悪くなって表へ出た。眼の前に、まっ黒いサングラス、顔面ひげだらけの男が立った。場所柄もわきまえず、まっ赤なポロシャツという軽装である。後輩の脚本家、中野顕彰だった。これが冬だと、ひと眼でウサギの毛皮と判る七分コートを着込んでいるはずである。
十年前、競馬で大穴を当てたときに買った、と言う。だが毎冬同じコートだから、それ以来ツキにはまったく見放されているらしい。
「ま、まだ二人だけですね」
少しどもりながら彼はいった。
ぼくより九歳年下だから、四十代後半になっている。もう二十年以上のつき合いだ。それにしても若い。三十代のとき、深夜の新宿で警官に補導されたという。高校生と間違えられたらしい。その直後から、ひげを伸ばしはじめている。若さを恥じるとは、もったいない男だ。
「だ、第五ステージへ行きませんか。バイキングがありますよ」
にっかつ社員のような口振りで、ぼくを誘った。まだ「夕べ」も始まっていないというのに、よほど空きっ腹で来たらしい。
食べ物といえば、ぼくは中野と飯を食うとき、いつもカレーライスをおごろうとする。ひげの先にカレーの汁がどのくらいつくか楽しみなのだ。が、中野もぼくの魂胆を見抜いているらしい。

カレーだけは、決して食べようとはしない。

突然、近くでざわめきが起った。受付につめかけていた来客が、二つに割れた。

ハンドライトが光り、ビデオカメラを構えたテレビクルーが、三組ほど後退(あとじさ)ってくる。カメラ越しに、近づいてくる喪服の一団が眼に入った。通称小政と呼ばれている小林政彦専務の左右には、渡哲也、舘ひろし、神田正輝、以下世にいう石原軍団の面々が続いている。

それは、異様な光景だった。

彼らはいずれも見開いた眼でハタと虚空をにらみ、唇を噛みしめ、頬をぴくぴく震わせていた。画一的沈痛な表情とは、この事をいうのだろう。そのうえ、靴音までもざくざくと揃えている。ナチス親衛隊の行進にそっくりだった。

「なんだよ。あれは」

見送ったぼくは、中野にいった。

「デ、デモンストレーションですね」中野が応えた。「テレビを意識してますよ」

「そういえば」

ぼくは、スポーツ新聞の記事に記憶があった。「裕ちゃんが重態のとき、病室の前に日本刀を抱えて坐り込んだ渡哲也がだな」

「ああ、ほ、報知でしょ。読みました」

中野がいった。「ボ、ボスに若(も)しもの事があったら俺も死ぬって、タンカを切ったそうですね」

「ところが哲の奴、腹を切るどころかまだぴんぴんしてるぞ」

「あ、あれも宣伝でしょう、石原プロの……大衆にアピールするために……今夜だってそうなんだから」
どこで仕入れるのか、中野の情報はいつも早い。
「しゅ、主催は石原プロ……にっかつは会場を貸しただけだそうですよ」
それを聞いて、ぼくの気持はすっかり白けた。わざわざスーツでめかし込んだことを後悔しながら、ぼくはいった。
「おい、先に食っちまおう」

第五ステージへ入った。
まわりには、裕次郎主演映画のポスターが貼ってある。中央の大テーブルには、バイキング形式の料理が並んでいた。
片隅のテーブルを囲んだ数人の男女が、派手な笑い声を立てている。
——野郎、俺たちより先に！　なんて食い意地の張った奴らだ！
むかっ腹を立てながら近づいた。笑っていたのは図体のでかいぎょろ眼の男をはじめ、各局のテレビレポーターと称する連中だった。
奴らは、ぼくと中野をじろりと見た。尊大な眼差が——俺たちを知らないのか、といっている。ぼくは内心——この俺を知らないのか、と胸を張って少し離れたテーブルの前に立った。奴らが、ぼくを知るわけがない。ふたたび奴らは、聞こえよがしに話しはじめた。
自分がいかに裕次郎と親しかったか。まさに自慢大会である。

――馬鹿め。

ぼくは、心の中で奴らを罵倒した。

――こっちは、裕次郎が初めて撮影所へ来たときから知ってるんだ。

ふいに奴らが静かになった。横眼でみると、ちょうど出ていくところだった。

いままでの笑顔はどこへいったのか。世にも厳粛な表情をつくっている。これから関係者にインタヴューをするつもりだろう。裕次郎の死を、心の底から惜しみ、眼をうるませて……。

とにかく、表情だけを瞬時に切りかえ、しかも、軽佻浮薄な正義感を臆面もなく振りまわせる特殊技能がなければ、レポーターというのは勤まらない職業だ。

ぼくと中野は、伊勢エビを探しながらテーブルを移動した。彼らが居た場所に立った瞬間、呆気にとられた。なんと大皿には、殻だけが散らばっているではないか。奴らはメインの伊勢エビだけをパクついていったのだ。

ぼくは別のテーブルへ駈けよった。ここの伊勢エビはまだ無事だった。それを自分の皿に盛り上げた。

「きょ、今日は他のスター連中、来ませんよ」

コールドビーフを嚙みながら、中野がいった。そういえば、小林旭、高橋英樹、二谷英明、浅丘ルリ子、吉永小百合……かつては日活のスターだった連中の姿を、さっきから一人も見かけていない。

「そんなに石原軍団は、受けが悪いのか」

「ええ、ス、スター達が主催でやろうとしたのに、石原軍団が断ったって」

ぼくは頷きながら、中野のひげに気がついてにんまりした。ひげの先に、伊勢エビのマヨネーズがべっとりとついている。なにも、カレーでなくてもよかったのだ。
「い、石原プロ、記念映画つくるっていってますけど、どうでしょうかね」
「出来っこない」ぼくはいった。
「哲の奴は、日活時代から客が呼べない役者だった。つまり、タダで観られるテレビならともかく、ゼニを払って見るほど魅力のある役者じゃない。舘ひろしや神田なにがしではスケールが小さすぎる。あとのタレントは、裕ちゃんの家でマキを割ってるような連中だ……裕ちゃんがいたからこそ、テレビに出して貰えたんだろうよ」
二十幾年か前、台湾との合作映画『金門島にかける橋』の打ち合わせで、山中湖にある裕次郎の別荘をたずねた事がある。その時、日活専属の、まさかと思うような脇役が、せっせとマキを割っていた。そのことを思い出していったのだ。
「こ、これから、どうなりますかね、石原プロは」
「なにしろ裕ちゃん以外は、演技力が無い烏合の衆だからな。テレビドラマに集団出演しているだけじゃ、人気が落ちる。だから、これからは選挙の応援とか、裕次郎記念イベントとか……浪花節的な美談を派手に仕掛けて、ファンの眼をひこうとするだろう。しかしファンは、演技とは関係ないハッタリを、本能的に見抜くからな。やがては離れて行くだろうよ」
そういいながら、ぼくは自分の育った撮影所と石原軍団を、なぜこうも皮肉な眼で見ているのだろう、と考えていた。
思い当ることがあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.